

発刊にあたって

平素より、愛知県看護協会にご協力ご支援を賜り厚くお礼を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が昨年2月頃から拡大し、今や第5波の波がきており、今までになく感染が拡大しています。ワクチン接種も加速していますが収束の目処が立たないのが現状です。

当協会は、令和2年6月から愛知県新型コロナウイルス感染(COVID-19 とする)緊急包括支援交付金事業に関連する5事業を進めてきました。この事業を進めるにあたり意思決定、実効性、機動性のある組織を念頭に「新型コロナウイルス感染プロジェクト」を立ち上げました。

軽症者宿泊施設への看護師派遣は、潜在看護師を派遣し健康観察を行ってきました。児童福祉施設及び障害福祉サービス施設・事業所の相談、児童養護施設等への看護師派遣は、電話相談、訪問相談を行い、感染防止対策の支援を行いました。クラスター発生時の看護師派遣事業は、クラスターの先遣活動として、迅速かつ的確な対応を図ることを目的に、DMAT、感染管理認定看護師、保健所、協会の職員による初動体制を整え活動しました。看護師養成所における実習補完事業等は、シミュレーターを協会と7つのグループに編成した看護師養所に設置し、実習の補完事業を進めてきました。

さらに、COVID-19に関連する応援体制の準備として、令和2年12月頃よりe-ナースセンターに登録している潜在看護師に向けて COVID-19 関連業務への応援協力を依頼しました。令和3年5月に名古屋市と愛知県からワクチン接種への看護師の派遣要請があり、COVID-19 関連業務に応援協力すると意思表示を示した看護師に向けてワクチン接種の募集を行い、多くの看護職が応募し、ワクチン接種への派遣を行うことができました。また、安心・安全・確実な人材を派遣するために、ワクチン接種に必要な知識、実技研修を行いました。

今回愛知県看護協会は、約1年余りにおよぶ COVID-19 の事業に対する活動を総括し、第1報としてまとめました。

本事業に、ご協力・ご支援いただきました皆さまへ、お礼を申し上げます。

公益社団法人 愛知県看護協会

会長 三浦 昌子

COVID-19により協会事業は大きな変革を迫られた。容赦なく降り注ぐ数々の難しい課題に直面し、翻弄される日々であった。愛知県から委託される事業も待ったなしで、「必要なことは何でもやる。引き受ける。」という会長の方針のもと、職員にも事業の必要性や看護協会としての使命を繰り返し説明し、理解協力を求めた。オンライン環境の整備なども急ピッチで進め、年度当初に計画した事業の8割をほぼ実施できた。残りの2割は県民向けイベントであり、コロナ禍であっても安全に実施できる感染対策が確率するまでの時期は中止せざるを得なかった。

職員は一丸となって「どうしたらできるか」の精神で、不慣れなオンライン環境にも挑戦し、膨れ上がる困難で膨大な作業にも前向きに取り組み、効率的な事業運営ができたことに心から感謝する。

コロナ事業を通して、特に事務職員のチームワーク、主体性、コミュニケーション力が培われたこと、愛知県や名古屋市行政との連携が強化できたことは、想定以上の副産物であり、まさに、ピンチはチャンスといえる貴重な体験になった。

専務理事 高木仁美

新型コロナウイルス感染症は瞬く間に全世界に広まり大混乱を起こした。得体の知れないこの恐ろしい渦は医療崩壊という状況を容易く引き起こし、感染防護服等の物資不足や差別・偏見など今まで医療従事者が経験した事がない日常をもたらした。本看護協会では現場で起きている状況を調査し、そのデータを基に県・行政に要望するなど現場にとって何ができるかを考え形にしてきた。愛知県や名古屋市からは軽症者施設やワクチン接種会場等への看護師派遣事業の依頼が相次いだ。潜在看護師に協力を呼びかけたところ、多くの看護師から「私に何かできる事はないですか？」との声掛けをいただき、「患者さんは勿論、看護職の仲間も助きたい！」そんな思いで様々な場所で力を発揮してくれた。

クラスター発生施設へは、休む暇もない戦場の様な現場から「地域のためにできることをしたい」と、快く派遣してくれた看護部長や感染管理認定看護師には心より感謝している。訪問指導に看護協会役員として同行したが、認定看護師の指導により施設の職員の表情が不安から安心に変化していく様を目の当たりにし、看護の力を感じた。

この冊子は、コロナ禍に立ち向かうため「看護職としてできる事は何か」の思いが詰まっている。新型コロナウイルスは現在もその力を変化させ更に猛威を振るっているが、これからも看護協会役員・職員、県内の看護職と共に「看護職としてできる事」を進めていきたい。

常務理事 小池三奈美

県内では令和2年2月に入り、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めた。ちょうどその頃、保健師職能委員会企画の交流会は準備を終え本番を待つのみであった。そこへ委員から、保健所では三密回避のため事業を中止しているとの情報が入り、協会は委員会の意見やコロナの蔓延状況から総合的に判断し、交流会を中止とした。担当理事として感染症に立ち向かえない虚しさや感染症であるコロナへ怒りを感じた。それから1年半が経ちオンラインでも目的の鈍れない企画となるよう委員会が練り直し、受講者の満足度が高い事業ができた時は嬉しく大きなパワーをもらった。

さて、新型コロナウイルス感染症関連事業はどれも難関で膨大な業務だった。臨床経験なし公衆衛生畑の私には、軽症者入所施設の看護職二交代勤務のシフトの作成と看護職の調整、クラスター発生施設への感染管理認定看護師への同行等人生初づくしであった。しかし、珍妙な案を提案した時でも感染の危惧を抱いた時でも教授してくれる仲間がいることは頼もしかった。未経験のためイメージできなく頭を抱えたこともあるが、一つ一つ経験することは私自身の看護を広げることにつながった。いつも同じ目標へ向かっている仲間として協会役職員が支えてくれた。外部の理事や委員からの生の声は勇気を受けてくれた。感謝!!近い将来コロナのトンネルの先がはっきりと見える日が来ることを願って発刊にあたっての一言とする。

常務理事 和久田月子

COVID-19 が全世界で猛威を振るい、国内でも感染者数が増加し、これまでの当たり前だった生活様式が当たり前でなくなり、感染予防対策のための「新しい生活様式」を実践していかなければならなくなった。その為、今まで当たり前のように集合・対面で行っていた認定看護師教育はじめ継続研修をどのように実施すれば良いのか、教育センター教員を中心に多くの時間を使い検討した。看護協会内のオンライン環境を整え、同時にマニュアルを作成し、オンラインによる研修を8月から実施することができた。しかし、講師や受講者、運営する協会職員も慣れない環境での運用で、毎回様々な問題に直面した。その都度、検討・改善を重ね、予定していた研修の殆どをオンライン研修で実施することができた。「研修を皆に提供したい」という思いに一致団結した結果である。

COVID-19 の感染状況に伴い、新たなコロナ事業に取り組みなくてはならないが、前例のないことを実践していくためには、職員一人一人が知恵を出し協力していく事の必要性を再確認できた。

常務理事 大矢早苗